

様式 1

研究報告書（平成 25 年度）

提出者 猪股祐介

提出年月日 2014 年 4 月 4 日

**【本ユニットにおける研究テーマ】**

和文 満洲移民女性に対する戦時性暴力に関する歴史社会学的研究

英文 Historical Sociology of the wartime violence against the women of Manchuria Settlers

**【研究のねらいと目的】**（600 字程度）

本研究の目的は、満洲移民女性に対する引揚時の戦時性暴力について、郡上村開拓団と黒川開拓団を事例として、入植から現代の被害者女性の語りまでの歴史と言説を分析することによって、満洲移民に関する知におけるジェンダーを明らかにすることである。

満洲移民女性に対する戦時性暴力は、その存在を知られながらも、満洲移民研究において研究対象となつてこなかった。満洲移民の引揚げの記録では、満洲移民女性に対する戦時性暴力はソ連兵による強姦に限られ、ソ連兵の野蛮さや被害女性が売春婦であったことなどが断片的に書かれるにとどまるが、その問題性が研究されることはなかった。

本研究では、2000 年の郡上村開拓団への聞き取り調査及び 2005 年の黒川開拓団への聞き取り調査における被害女性の語りと、満洲移民の入植から引揚げそして現在までの歴史を分析することによって、満洲移民女性に対する戦時性暴力におけるホモソーシャルリティと被害女性の犠牲者化について考察する。

本研究の意義は、満洲移民研究における戦時性暴力批判の不徹底が、戦後日本のアジア・太平洋戦争の被害者意識の構成に果たす役割を明らかにすることである。なぜ被害女性の語りは聞き取られてこなかったか。なぜ 2000 年代になって被害女性は沈黙を破ったか。満洲移民研究において被害女性の語りをいかに位置づけるか。これらの問いに答えることによって、満洲移民研究に戦時性暴力を組み込むことは、「慰安婦」などの東アジアの戦時性暴力と歴史認識問題を論じる上でも欠かせない作業となるだろう。

**【研究業績】** 学会報告・論文など

・共著

蘭信三編. 2013. 『帝国以後の人の移動：ポストコロニアリズムとグローバリズムの交差点』. 勉誠出版.（第 5 章「満洲引揚げにおける戦時性暴力：満洲移民女性の語りを中心に」249-270 頁分担執筆）

**【成果の概要】**（800 字程度）

郡上村開拓団と黒川開拓団の被害女性の語りから、ソ連兵による強姦に開拓団幹部が協力者として関与していたことが明らかとなった。郡上村開拓団では本部の財産を守るために、ソ連兵に未婚女性が強姦される状況が、開拓団幹部によって作られていた。また黒川開拓団では、ソ連軍に現地住民の襲撃から守ってもらうために「慰安所」が設置され、未婚女性が選ばれた。

これら二つの事例から、満洲移民女性に対する戦時性暴力におけるホモソーシャリティと被害者の犠牲者化について、次の 3 つのことを明らかにした。第一に被害女性として未婚女性が選ばれ、出征兵士の妻が除外されたことから、開拓団幹部と出征兵士との間のホモソーシャリティが明らかとなった。第二に開拓団幹部による被害女性の選別や日本人男性による強姦があったことを隠すために、被害者が犠牲者化されたことが明らかとなった。第三に満洲移民女性に対する戦時性暴力の記録において、敗戦による男性性の喪失の隠蔽と被害女性の蔑視が、被害者の犠牲者化を招いたことが明らかとなった。

満洲移民研究が戦時性暴力を正面から扱ってこなかった理由については、次の 3 つのことを明らかにした。第一に、満洲移民研究が帝国日本の植民地に対する加害を批判することに重きを置き、日本人内部の加害－被害関係を研究対象としなかったからである。第二に、満洲移民女性に対する戦時性暴力が国家による暴力の形をとらなかったため、周縁化されたからである。第三に、満洲移民研究が 90 年代以降、体験者の聞き取り調査を行ってきたが、戦時性暴力についてはタブー視して踏み込んで聞き取ってこなかったからである。これに対して、2000 年代の聞き取りでは、「慰安婦」が社会問題化していたため、自らの被害体験の周縁化に対する異議申立として、引揚時の戦時性暴力が語られた。また語り手の高齢化による性暴力被害を語ることへの抵抗感が無くなったことが、語りを促した。

**【通信欄】**